



インタビュー 前田眞澄 (アフリカ工房 代表)

アフリカには日本人が忘れてしまったものがある。

小さい頃からなぜか「違うもの」に惹かれた少女は、肌の黒い人たちが住むアフリカに強い興味を持っていた。「あの人たちと分かり合えるのだろうか?」そんな思いを抱きながら、少女は念願だったガーナ大学に進む。大学卒業後は青年海外協力隊に参加し、ガーナに関わり続ける。数年後、ガーナで出会ったシアバター製品の事業化を決意し、日本で起業。販売する天然の保湿クリームと石鹸は、ナチュラル志向の女性から大きな反響を得た。自分の肌の色を忘れるくらいアフリカに溶け込み、アフリカの路上でボロボロの服を着た人たちとも心を通わせたアフリカ工房代表の前田眞澄さんに、アフリカへの思いと自らの起業家人生について聞いた。



前田眞澄(まえだますみ)
アフリカ工房 代表
山形県鶴岡市 生まれ

日本海と山に囲まれた自然豊かな土地で幼少時代を過ごす。自由学園卒業後、1997年にガーナ大学に入学。卒業後は青年海外協力隊に参加し、ガーナのズオ村でシアバターに出会う。結婚後、「日本とアフリカを笑顔で繋ぐ」を理念とし、アフリカ工房を立ち上げる。シアバターの保湿クリームと石鹸を販売し、ナチュラル志向の女性の間で話題になっている。

Index

起業家インタビュー

アフリカ工房 代表 前田眞澄 さん

経営コラム なぜ18年間赤字だったハウステンボスはV字回復できたのか?

ベストセラー解説 「特定の人としかうまく付き合えないのは、結局、あなたの心が冷めているからだ」

メルマガバックナンバー 人事労務相談室

小さいころはどんな子どもだったんですか?

本を読んでいる子供でした。父の方針で家にテレビが無くて、もっぱら読書少女でした。父は山形大学農学部の教官だったので、父と一緒に大学内の畑で遊んだりもしました。

中学は?

小6のときに東京の祖母の家に遊びに行ったとき、祖母の家の隣の子が自由学園に行っているのを見て、すごく興味を持ったんです。自由学園は全寮制で、食事洗濯もすべて自分たちでやる学校です。母も私を自由学園に高校から行かせたいと思っていたのですが、私が「中学から行きたい!」と言い出して、それで急遽行くことに(笑)。

中学から親元を離れて?

そうです。自由学園は中1から短大まで8年間の一貫教育で、全校生徒が600人います。その600人分の昼食を生徒達が当番制で作るんです。しかも薪でご飯を炊いて(笑)。朝と晩の食事もある部屋ごとに当番制になっており、自分たちで作ります。中1から短大1年生までが1つの部屋で生活しますから、リーダーは大変です。一部屋にひとりには問題児がいますからね(笑)。そんな生活なので、コミュニケーション力や人との関わり方については鍛えられましたし、当時の友達との結束はいまだに固いです。まさに「同じ釜の飯を食べた仲間」ですから(笑)。

部活動とかはあるんですか?

ないですね。学校から帰ったら、農業やったり、料理作ったり、裁縫したりとか(笑)。

あ、家事をするわけですね(笑)。

そうなんです。その割りに今、家事は得意じゃないんですけどね(笑)。そんな感じで団体生活を送って、短大からは寮を出られるので、1人暮らしをし始めました。さすがに息苦しくなっていました。

卒業後の進路についてはどう考えていたんですか?

夏休みに帰郷したとき、父の仕事の関係で、ガーナやバングラ



アフリカの美しい風景に魅せられた

ディシュの人たちが家に遊びに来ていたんです。バングラディシュ人は大学の先生で、卒業後はバングラディシュの大学に来たらどう？って私に言いました。それを聞いていたガーナ人が「ガーナにも大学あるよー」とすっごく軽く言うんです。バングラディシュの先生は真面目な人なんですけど、ガーナ人はすごくノリが軽くて（笑）。でもなぜか、ガーナの方が面白そうに感じたんです。もともとアフリカには興味があって、板垣真理子さんが撮った西アフリカの写真集を見てきれいだなと思ったり。小さい頃から「違うもの」に興味があって、肌の色が黒いアフリカの人たちはどんなことを考えているんだろう、みたいなことをずーっと考えていました。

軽いノリのガーナ人（笑）。

ですね（笑）。そのガーナ人の弟さんを通じて、ガーナ大学の情報が載っている本をもらいました。実はその弟とは以前、東京のYMCAで行なわれたボランティア活動のときに会っていたという不思議な縁で。

アフリカに引き寄せられている（笑）。

そうですね（笑）。でもそのガーナ人もいい加減な人で、知らない間にアメリカに行っちゃいました。それで私はもらった本に書いてあるガーナ大学宛に手紙を書きました。「入りたいんです」って。でも待てども待てども返事は来なくて、あきらめかけていた時に、ガーナにいる日本人から手紙が来たんです。その人はガーナ大学に留学している日本人学生だったのですが、ガーナ大学の学長から「日本人からこんな手紙が来ているんだけど、どうしよう？」と相談されたみたいなんです。すごくいい人で、「もしあなたが本当に来たいのなら、私が手伝います」と言ってくれました。保護者のようなその人を頼りにガーナに行くことになりました。

行っちゃいましたか。ガーナ大学の何学部ですか？

まず3ヶ月間は語学学校に入って英語（ガーナの公用語は英語）を学び、その後宗教と演劇を学ぶ学部に入りました。もともと口承文学（記載文学の発生以前、口承によって語

り継ぎ歌い継がれてきた文学）を学びたかったのですが、英語力の制約によって叶いませんでした。でも宗教はすごく面白かったです。ガーナは南が基督教の信仰が強く、北はイスラム教です。私は高校がクリスチャン系の学校だったので基督教にはなじみがあったのですが、ガーナの基督教は同じ基督教でも土着の宗教と結びついて独特なものになっています。ガーナでは魔女の存在が本気で信じられていて、何か悪いことが起こると「あの女は魔女だ」と言って魔女のせいになります。大学の先生からしてそういう感じなのです（笑）。メインはイスラム教を学んでいたのですが、イスラム教も土着の宗教と結びついて独特なものになっていました。クラスの中で私以外は全員イスラム教信者という中で、勉強していました。勉強はすごく面白かったですね。

ガーナ大学は国立大学ですよ。入るのに試験は無いんですか？

高校時の成績で判断されますね。外国人は比較的入りやすいようです。入ってみると学生はみんなすごく勉強していて、試験前になるとみんなで集って、試験に出そうな問題について熱心にディスカッションします。しかもすごく頭が良くて、説明をしたり自分の意見を言うのが上手なんです。卒業後はみんな海外に出て活躍しています。就職先を見ると、やはりみんな優秀だったんだなと改めて思いますね。

ガーナではどんなところに住んでいたんですか？想像もつかないんですけど。

寮は集合団地みたいなところで、とりあえず電気は通っています（笑）。ガスは来てなくて、キャンプの時に使う灯油を入れて燃やすコンロみたいなもので料理をしました。「毎日がキャンプみたいだね！」って遊びにきた友達に言われました（笑）。部屋は3人部屋で、ライベリア人とガーナ人と同部屋でした。この生活はすごく面白かったですね。学費、寮費、日本への往復旅費などを合わせて年間100万円くらいかかっていたと思います。生活費は寮費は別として



ガーナのズオ村でシアバター石鹸づくりに取り組んだ

月3～4万円あれば十分ですが、留学生の学費は割高になっていたと思います。

現地に行ってみて何を感じましたか？

やはり貧しくて、特に北のイスラム地域は深刻ですね。少女たちが結婚するときに持参する鍋や服を買うために、街に出稼ぎに行ったりするという問題があります。彼女たちは首都の市場で重い荷物を頭に載せて運ぶ低賃金で過酷な仕事をしています。

なるほど。やはり貧困が大きな問題なんですね。大学を卒業してからはどうしたんですか？

日本に戻って就職しようかとも思ったんですが、ガーナにいる時に知り合った日本人の中に青年海外協力隊のOBの人がいて、協力隊に誘われました。それで一旦帰国して手続きをして、再びガーナに渡りました。当時の私は「自分は何でもできる！」と本気で思っている超ポジティブな日本人でしたね(笑)。

(笑)。青年海外協力隊は給料はもらえるんですか？

はい。だいたい月12万円のうち4万円を現地での生活費にあてて、残りを積み立てて、日本に帰国したときの生活費として貯めておくという制度になっています。

協力隊として再びガーナへ行って、どんな仕事をしたんですか？

北部のいくつかの村を回って生活改善を支援するという仕事です。私はこちら側のやり方を押し付けるのではなく、現地の人々がもともと持っているものを生かした支援がしたいと思っていました。ワークショップのような形で参加型の話し合いをしながら、まず現地ですどんな問題があるのかを聞き出しました。水がないとか病気になっても薬が買えないとか、少女たちが出稼ぎに行ってエイズに感染して帰ってくるとか、さまざまな問題がありました。それとやっぱりお金が無いという問題は大きいです。現金収入をいかに増やすか、そしていかに手に職をつけさせるか。もともと私はアフリカが好きという気持ちから始まっているので、アフリカのいい所をいっぱい知っていて、それらを生かした仕事で現金収入を増やすことができればいいなと思っていました。現地の女性たちに何が得意かと尋ねてみると、シアバター作りが得意だと言います。シアバターについて調べてみると、ヨーロッパでも注目されている素材だということが分かりました。じゃあこのシアバターで石鹸を作ろう！と。今までも自分たちで作っていた石鹸があったのですが、もっとちゃんとした、泡がしっかりとつ石鹸を作ろうということになったんです。

石鹸事業はうまくいったのですか？

ぼちぼちですね。ホテルやお土産屋に置いてもらったり、日本人の観光会社を営んでいる人が定期的を買ってくれ

くれたりはしました。でも私が帰国した後にいろいろあって・・・。当時の協力隊で私の同僚だったガーナ人が会社を興し、協力隊で覚えた石鹸の作り方を利用してシアバター石鹸を作り、ホテルに納入し始めたんです。そんなこともあって、色々なことが簡単にはいかないなと思いましたね。

そうなんですか。それで、協力隊の任期が終わって日本に帰ってきた、と。

そうです。ガーナで「シアバターで石鹸作って、売ってみたら？事業化してみたら？」とガーナの人たちに言っていました。日本に帰ってきて、「そういう自分は何ができるのだろう？」と悶々と考えていました。いろいろ考えて、ひとつ、やっぱり農業は大切だ、農業をやろうと思いました。それで有機栽培の農業研修に参加したんですけど、これが半端じゃなくらいきつくて、ちょうど体調が悪かったことも重なって1週間で挫折してしまいました。私が来るところではなかったと思いました。

農業をやるにはまず体力がいるんですね。

そうですね。同期では私以外にも女性はいましたが、その人、元ボディビルダーでしたから(笑)。その後はペンションでアルバイトしたりした後、協力隊のOBで通販会社をやっている方がいて、その会社に就職しました。その会社ではものづくりの現場を取材して、そこで作られた商品を販売する仕事に関わりました。北は青森から南は沖縄まで、全国の職人さんを訪ねて取材しました。現場を見て思ったのは、日本もガーナも、ものづくりの現場には通じるものがあるということですね。

なるほど。農業やったり通販会社に入ったり、いろんな仕事をしながら、自分の生き方を探していた時期ですか？

まあ、そうですね(笑)。それでまたまた3ヶ月の短期でアフリカの石鹸に関わる仕事があるよと協力隊から言われて、それに行こうと(笑)。それを機に通販の会社も辞めることにしました。3ヶ月間アフリカに行き、仕事をして、日本に戻ってきて。で、そのころ以前の協力隊のときに知



事務所の販売スペースでもシアバターを販売しています。

り合った男性とお付き合いしていて、遠距離恋愛も大変なので、その人がいる名古屋に行くことにしました。名古屋で飲食店のアルバイトをしたり英語の先生をやりながら、いろいろと必死になって頑張っていた時、またまたアフリカへのあの思いが湧きあがってきました。ガーナのおばちゃんたちに「シアバター石鹸作って売ちなさい」と言っておいて、売り先が無くて困っているあの人たちを放り出して帰ってきた私は、いったい何をやっているんだろう？という思いです。

アフリカへの思いは強烈なんですね。

そうですね。とにかくアフリカの文化を伝えたいという思いが強くて。それで結婚して夫ともにシアバターを輸入販売する「アフリカ工房」を立ち上げました。事業を立ち上げてからも、アフリカの思いが強すぎて、肝心のシアバターの良さが伝えきれず、販売面で苦労しました。「思いが重すぎる」とまわりの人からよく言われました(笑)。今は商品のこととアフリカのことをバランスよく伝えることを心がけています。アフリカへの思いだけでパーっと走り始めたんですけど、事業全体を俯瞰して見て、いろんなことをやらなくちゃといけななと思って、現在に至る、という感じです(笑)。

本当にいろんなことしてきましたね(笑)。

もうやりたいことだらけでしたね。よく「何がやりたいのか分からない」と悩む若者の話を聞くのですが、その気持ちが全然分からなかったですね。何でやりたいことが無いの？と不思議でした。私の場合、次から次へとやりたいことが出てきますから(笑)。でも30歳を越えたときに、ふとやりたいことが無くなったんです。無くなったと言うか・・絞られたんです。アフリカ行ったり農業やったり英語の先生やったりといろいろと思うがままにやってきましたが、ある時からふと「もっと地に足をつけて生きよう」と思ったんですね。それで結婚して、その人と一緒にアフリカのシアバターを日本で事業化して。そしてガーナの人たちともう一度きちんと仕事をして、アフリカの文化や歴史を伝えながら、事業として成り立たせようと思ったんです。それが私たちの使命だと思いました。現在はシアバターの保湿クリームをメインに販売し、最近シアバター石鹸も商品化して販売しています。ホームページ(販売サイト)もリニューアル中で、完成後はどんどん販売していきたいと思います。シアバターが売ればガーナの人たちのモチベーションもどんどん上がっていくので、これからがすごく楽しみです。

アフリカのいいところを日本に伝えたい？

そうですね。アフリカは経済的には貧しいですが、日本が失ったものがたくさんあります。例えば、核家族化が進み子育ての負担が母親一人に集中して「育児ノイローゼ」が社会問題化する日本に対して、アフリカでは母親が赤ちゃ

んをおんぶしながら仕事をしていたり、近所ぐるみでおおらかに子育てしています。日本でも昔はそうだったと思いますが、今では地域のつながりが希薄になっていると感じます。子育てひとつとっても、アフリカから日本が学ぶものもたくさんあると思います。ガーナの少女たちは「シアバターなんて古臭い。外国製のきれいな箱に入った石鹸の方がいいに決まっている」と思い込んでいてその価値に気づいていないのですが、日本人のお客様がシアバターを良いと思ってくれて、継続的に購入してくれれば、ガーナの人たちの大きな自信になると思います。

アフリカ工房はシアバターを介して日本とアフリカをつなぐ存在ですね。

そうですね。アフリカに行く前は、全く人種が異なる人たちと分かり合えるのだろうかと不安でしたが、ガーナ大学に通い出してから自分の肌の色を忘れるくらい溶け込んでいました。協力隊として関わりだしてからは、ガーナの路上でボロボロの服を着てモノを売っている人たちとも心を通わせることができました。ガーナ人は貧しいけれど、生きていく上ですごく大切なことを知っている人たちです。学歴とか、何が出来るのかとか、本から得た価値観とかではなく、人間として大切なこと、人への優しさを知っている人たちです。そういう人たちとつながって、少しずつですけど、前に進んでいきたいと思っています。

本日は楽しいお話、ありがとうございました！🍪



洗顔用シアバター石鹸 チボ



ぴゅあシアバターナチュラル(上)、ラベンダー(下)

【会社プロフィール】
会社名: アフリカ工房
所在地: 名古屋市中川区助光2丁目1001丸晶ビル1F
TEL: 052-304-1018
URL: <http://africakobo.com/>

